

わっと！みゅーじあむ



氷上回廊水分れフィールドミュージアム



【地域みなさんと共に歩んだ2023年】

秋に、丹波の自然、文化、人々の暮らしなど、何気ない日常を切り取った写真を未来へと残す市民参加型アーカイブ事業として、丹波市内で撮影された写真を一般募集した写真展「撮っちゃったたんば2023」を開催しました。市内外154名からお寄せいただいた写真約200点を展示しました。

また、冬季企画展「標本大集合 いきもののナゼにせまる」では、県立柏原高等学校理科部をはじめとする県内の研究・教育施設の協力を得て、約180点の様々な標本をギュッと集めて展示し

ました。標本を通して、今ある自然を未来へ残す大切さを伝える展示になりました。

丹波竜化石工房「ちーたんの館」

【鳥盤類展～植物食恐竜のホネの秘密～ 2023.7.22 (土) ～9.3 (日)】

丹波竜化石工房では、「鳥盤類」に含まれる植物食恐竜たちをテーマとした夏期特別展を開催しました。恐竜は、骨盤の特徴によって「竜盤類」と「鳥盤類」の大きく2つに分けられます。「鳥盤類」は、骨盤の特徴が鳥類に似ていることからその名前が付けられ、トリケラトプスやアンキロサウルス、ステゴサウルスといった多くの植物食恐竜が分類されます。鳥盤類の恐竜たちはトゲやヨロイ、角やフリルなど不思議な特徴を持つ種が多く、本展では我々ヒトの骨格と比較しながらその特徴について紹介することで、鳥盤類の恐竜たちについて深く知ることのできる展示を行いました。



植野記念美術館

【丹波市制20周年・当館開館30周年に向けて】



春季展「宮廷画家ルドゥーテとバラの物語」では、旧氷上郡柏原町（現丹波市柏原地域）の「町の花」がバラであったことにちなみ、18世紀フランスで活躍した宮廷画家ルドゥーテによるバラの作品を紹介しました。また、夏季展「知ってる？丹波ゆかりの美術コンクール」では、「青垣2001年日本画展」や「春日水彩画展」など地域ゆかりの全国公募展の大賞作品を中心に展示するなど、地域に根差した文化芸術を紹介する企画展を行いました。

9月初めから令和6年1月末までの期間、改修工事のため休館しながらも中央小学校での出前授業や柏原陣屋跡での出張展示など活動を継続し、丹波市制20周年・開館30周年に向け、収蔵作品の整理・調査も行いました。

あおがき 青垣いきものふれあいの里 さと

【自然界に多くみられる数列】

イタリアの数学者フィボナッチが紹介した数列を「フィボナッチ数列」と言います。(1、1、2、3、5、8、13、21、34、55、89、144...) どの数字も前2つの数字を足した数字という規則の数列で、自然界にはこの数列が多く潜んでいます。「松ぼっくり」の鱗模様には、時計回りに8枚、反時計回りに13枚。「花びら」の枚数は、ユリ、アヤメなどは3枚、桜、キンポウゲなどは5枚と決まっているなど、自然界に潜む植物の不思議を発見してみませんか。令和6年度は企画展でその一部を展示予定です。



かす が れき し みんぞく し りょうかん 春日歴史民俗資料館

【冬季企画展「俳人・桃史が歩んだ道と戦場」】

2024.1.20 (土) ~ 3.10 (日)



春日地域出身の片山桃史〔本名・隆雄〕(1912~1944)は、昭和初期に「新興俳句」の世界で活躍し、33歳という若さで出征先の戦場で亡くなった俳人です。令和4年、桃史の遺族から多数の資料を寄贈いただきました。桃史の没後80年となる今年に、桃史の俳句が掲載された俳句雑誌や、戦地から家族へ送った手紙などを展示し、俳人として桃史が歩んだ道のりと、桃史が見た戦地の场景を探ります。あわせて展示では、桃史や丹波にゆかりのある俳人たちに関連資料とともに紹介しています。

ちゅうおう と しょうかん 中央図書館

【丹波市子ども司書養成講座】

市内の図書館では、子ども司書養成講座を開講し、周りの人たちに読書の楽しさを伝える「子ども司書」を養成しています。令和5年度は小学4~6年生の9名が全7回の講座を受け、「丹波市子ども司書」として認定されました。

講座の内容

- 第1回 図書館の役割、本の成り立ち
- 第2回 資料の種類、分類、装備
- 第3回 レファレンス業務の体験
- 第4回 おすすめ本の紹介
- 第5回 カウンター体験
- 第6回 読み聞かせの練習
- 第7回 受講生によるおはなし会





青垣いきものふれあいの里



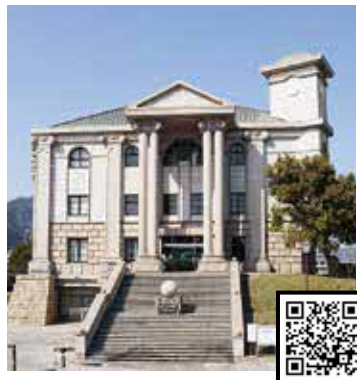
春日歷史民俗資料館



中央図書館



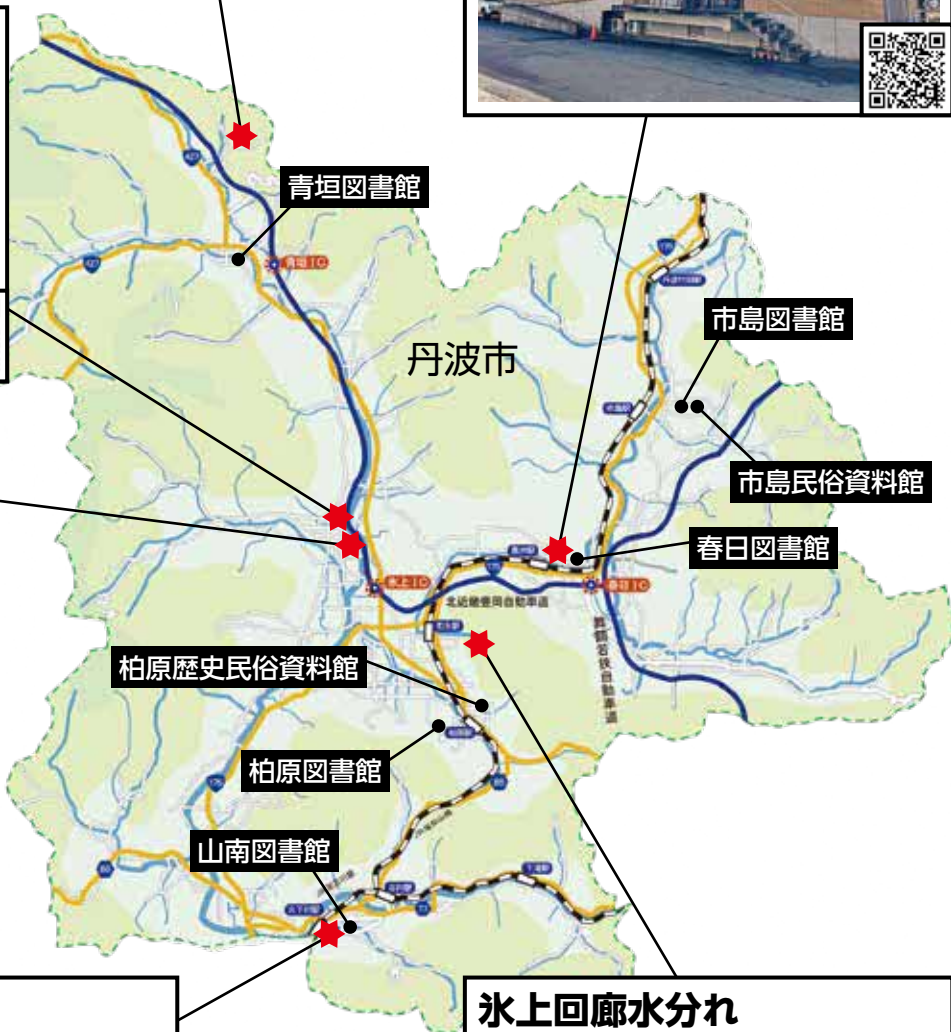
植野記念美術館



**丹波電化石工房
「ちーたんの館」**



**氷上回廊水分れ
フィールドミュージアム**



今号から図書館と歴史民俗資料館が加わり、リニューアルしました。「わっと！みゅーじあむ」には、「ミュージアムって何だろう？（What's Museum?）」と興味を持ってもらいたいという願い、「わっ！」と驚くような体験と楽しさ、そしてミュージアムから広がる学びの「輪」という意味が込められています。